ブバルディア新品種の開花特性およびウイルスフリー苗の実用性評価
～適正シェード条件と培養苗の実用性の解明～

東京都作出のブバルディアについて、培養により得たウイルスフリー苗と従来苗を比較した結果、開花特性や形態に大きな差は認められず、培養苗の実用性が確認されました。また、品種や栽培時期に応じた適切なシェード期間の設定が、安定した開花と品質確保に重要であることが明らかとなりました。

実施機関	大島事業所	事業名	大島特産園芸作物における生産振興技術対策

背景・ねらい

東京都が育成したブバルディア新品種の普及拡大と高品質安定生産には、健全な苗の供給体制の確立と、品種特性に応じた栽培管理技術の確立が不可欠です。特に、ウイルスフリー苗（培養苗）は初期生育の安定化や病害回避の観点から有望ですが、現地栽培における季節ごとの収量性や従来の苗（非培養苗）との生育差異について十分な検証が求められています。

ブバルディアは短日植物であり、シェード処理による開花調節が重要ですが、品種および栽培時期に応じた処理期間の知見は十分に蓄積されていません。

本試験では、東京都育成の第１期および第２期品種を対象とし、母株の培養の有無（培養苗・非培養苗）およびシェード処理期間の違いが開花や形態的特性に及ぼす影響を明らかにし、現地栽培に適した管理指針を提示することを目的としました。

成果の内容・特徴

①　母株の由来の影響について

多くの品種および栽培時期において、開花率、切花長、花蕾数、奇形花率等の主要形質に有意な差は認められず、影響は極めて小さいことが確認されました。品種別では第２期品種「恋桜」において、培養苗の切花長や小花サイズが非培養苗よりやや小さい傾向がみられましたが、実用上の品質に影響する水準ではありませんでした（表１）。栽培時期では四季を通じて、母株の由来による差異は一部形質に限られ、変動幅も小さく、栽培上問題となる差ではありませんでした（表２は「クリアピンク」の事例）。このことから、培養苗は非培養苗と同等の切花品質を確保できることが明らかとなりました。

②　シェード処理期間の影響について

品種および栽培時期により適正範囲が異なることが明らかとなりました。第１期品種では概ね７～14日間、第２期品種では主に21～28日間の処理により、開花率および品質のバランスが良好となりました。さらに、第１期品種は比較的短期間のシェードで開花誘導が可能であるのに対し、第２期品種ではより長期間の処理が必要であり、生育特性に応じた管理が求められることが明らかとなりました。

成果の活用と反映

培養苗は大島の栽培条件下においても実用性が高く、従来の非培養苗と同等の品質を確保できることが明確となりました。また、品種および栽培時期別の適正シェード処理期間を明らかにしたことから（表３）、生産現場での開花調整技術の高度化が可能となり、安定的な出荷と品質の向上が可能となりました。本研究は大島におけるブバルディア栽培指導の基礎資料として活用できることから、他の島しょ地域へも技術情報を展開できます。

（遠藤　芙蓉児）

表１　各品種における母株の由来による差異の分散分析検定結果[a]

品種	到花[b]日数	開花率[c](%)	切花長(cm)	節数	側枝数	側枝長[d](mm)	花房幅(mm)	小花サイズ(mm) 花冠径	小花サイズ(mm) 花筒長	花蕾数[e]	奇形花率[f](%)
シルキーホワイト	NS	NS	NS	NS	夏冬	NS	NS	NS	NS	NS	NS
パールピンク	NS	NS	夏	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
クリアピンク	秋	NS	NS	冬	冬	NS	NS	NS	NS	NS	NS
サニーレッド	NS	NS	NS	NS	NS	NS	冬	NS	NS	NS	NS
スノーピンク	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	冬	NS	NS	NS
恋桜	NS	春秋	春冬	NS	NS	冬	冬	春冬	春秋冬	NS	NS

a) 母株別に分散分析を行った。NSは有意差なし、p<0.05の有意差が発生した場合はその栽培季節を記載　b) シェード開始から開花までの期間　c) 整枝したシュートのうち開花したシュートの割合　d) 花房の下の節から伸びた側枝を測定　e) 上位三節で開花が見られた花枝にある花蕾数　f) 調査した花数のうち奇形が発生した花の割合

表２　母株の由来とシェード期間が開花および形態的特性に及ぼす影響(「クリアピンク」)

試験区 母株	シェード	到花[b]日数	開花率[c](%)	切花長(cm)	節数	側枝数	側枝長[d](mm)	花房幅(mm)	小花サイズ(mm) 花冠径	小花サイズ(mm) 花筒長	花蕾数[e]	奇形花率[f](%)
培養苗	7日	41	96	48	7	12	72	83	16	40	21	0.0
	10日	40	94	45	6	11	73	87	34	38	29	0.4
	14日	42	96	45	7	12	79	93	15	40	30	0.0
非培養苗	7日	38	96	50	7	12	82	87	16	40	25	0.1
	10日	39	96	48	7	12	71	88	15	39	30	0.4
	14日	35	96	44	7	12	68	84	15	42	30	0.0
統計結果[a]												
分散分析[g]	母株	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	シェード	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	**
	母株×ｼｪｰﾄﾞ	**	NS	NS	NS	NS	**	NS	NS	NS	NS	NS
多重比較[h](シェード)	7日							a				a
	10日							b				a
	14日							ab				ab

a) 母株別に分散分析を行った。NSは有意差なし、p<0.05の有意差が発生した場合はその栽培季節を記載　b) シェード開始から開花までの期間　c) 整枝したシュートのうち開花したシュートの割合　d) 花房の下の節から伸びた側枝を測定　e) 上位三節で開花が見られた花枝にある花蕾数　f) 調査した花数のうち奇形が発生した花の割合 g) 母株とシェードとで二元配置分散分析を行った．NS：有意差なし　＊：p＜0.05　＊＊：ｐ＜0.01　h)シェード間でtukey-Kremerの多重比較を行った・異なるアルファベット間で有意差あり (p<0.05)

表３　品種、時期別の適正なシェード日数

品種	栽培時期 春	夏	秋	冬
シルキーホワイト	7	7～14	7	14
第1期品種 パールピンク	10	7～14	7	7～10
クリアピンク	7	7～14	7～10	7～10
サニーレッド	28	14	21	21～28
第2期品種 スノーピンク	21	21～28	21	28
恋桜	21	14	21	28